



クラシックで読み解く

オーディオの疑問

文 山之内正

オーディオ評論家 第111回

アナログレコード再生の環境を維持するには

手元にたくさんアナログレコードを持っている読者は少なくないと思うが、それを日常的に再生して楽しんでいる人はそれほど多くはないのではないだろうか。CDが音楽再生の主役に台頭してからざっと30年、時が経つにつれてアナログレコードの存在感は薄れていってしまった。

アナログレコードを再生する環境を維持すること自体、かなり大変になってきた。レコードプレーヤーにはモーターやベルト、カートリッジにはレコード針やゴムなど、経年変化が避けられない部品や素材が多く、何十年もの間、性能を維持するのはとても難しい。さらに、工業製品の宿命として、一定の年数を経ると部品が手に入らないという事態に陥る。

手持ちのレコードプレーヤーが壊れてしまったからと言って、手軽に新しい製品に買い替えることも難しい。まず、カタログに載っている現行製品は限りなくゼロに近い。あるにはあるが、極端な低価格機かマニア向けの高級機が中心で、かつて大量に販売されていたようなミドルクラスのアナログプレーヤーがなかなか手に入らない。



コード Chordette DUAL
価格 115,500円 (税込み)

●入力インピーダンス 30-47kΩ, 50-200pF ●入力ノイズ 1.1nV/Hz ●最大出力電圧 10Vrms ●イコライゼーション 0-75dB RIAAカーブ ●ゲインレンジ 60dB, 65dB, 70dB, 75dB ●低域音挿れフィルター -24dB/オクターブ 50Hz以下 ●入力 1×RCAステレオ ●出力 1×USB1×RCAステレオ アナログ 1×TOSLink ●USB出力 44.1/48kHz, USB2.0 ●電源アダプター 12V 3A 2.1mmコネクター センターピン・ポジティブ 100V-240V 50/60Hz 1A電源アダプター付属 ●サイズ: W160×D72×H43mm ●重量: 560g
(問い合わせ: タイムロード ☎03-5758-6070)

カートリッジなど 手に入りにくい周辺機器

幸運なことに音の良いレコードプレーヤーを使い続けられる環境があったとしても、レコード再生に欠かせない周辺機器が手に入りやすくなってしまったので、再生環境を維持するのはやはり簡単ではない。フォノ入力を含めたアンプは以前に比べるとすっかり減っているし、カートリッジ、ヘッドシエル、フォノケーブル、昇圧トランスなど、昔なら簡単に手に入った製品やアクセサリ類が、いまは選択肢が非常に狭くなっている。

アナログレコードを継続的に楽しむためには、そうしたいろいろな障壁を乗り越えなければならぬ。さらに、今後はいまま以上に入手やメンテナンスが難しくなるのは目に見えている。目の前にある千枚単位のレコードライブラリーを前に、頭を抱えている音楽ファンの姿が目につく。

正直に言えば、私自身も同じ悩みを抱えている。ハードウェアの環境はなんとか維持しているが、レコードプレーヤーは「30年物」で、とくに寿命は越えている。いつ動かなくなっても不思議ではないし、最近はその徴候も見えてきた。

小学生の頃から買い集めた相当な数のレコード

Profile

Tadashi Yamanouchi

1957年、横浜市生まれ、
東京都立大学理学部卒、
オーディオ専門誌の編集に従事し、
91年よりフリーランスでオーディオ、
デジタルAVなどの専門誌を中心に
執筆活動をしている。
著書に「はじめて楽しむホームシアター」
(光文社新書)など。

には、特別な愛着のあるものが少なくない。せめて愛聴盤だけでも、この先安心して聴けるようにしたいものだ。

最新のコンポーネントに買い換える？

私自身、まだ結論は出していないが、「レコード保存」のための方法は一応は考えている。第一案は信頼性の高いアナログプレーヤーをはじめとする最新のコンポーネント群に買い替えるというものだが、どうやら半端ではない予算がかかりそうで、実現はいつのことになるかわからない。

第二案は、少なくともいま楽しんでるクオリティーを完全に維持した状態で、レコードの音をデジタル化するというプランである。かつてパソコンを使ってCDに焼いてみたとき、アナログレコードの膨大な情報量をCD-Rには収め切れないことがわかったので、このプランはその後進展していない。だが、CDを上回るクオリティーでデジタル化するアプローチが最近では現実味を帯びてきたので、もう一度挑戦してみる気持ちが強まっている。

実際にレコードをデジタル音源として保存するためには、カートリッジの微小信号をCD並みの



フルテック GT40 USB DAC
価格41,790円(税込み)

●USB&アナログ入出力対応オーディオインターフェース●接続方式:USB(B端子)、アナログ入出力 RCAピンジャック1系統(アナログ入力はスライドスイッチによりMC-MM-LINEの3入力に切り替え可能)●サンプリング周波数:オーディオアプリケーションソフトに依存 24bit/96kHz(MAX)●周波数特性:20Hz~20kHz(40Hz:±0.5dB/15kHz:-0.5dB)●SN比:-90dB(A-wtd)/ライン出力●ライン出力レベル:1Vrms●ライン入力レベル:MC0.5mV/MM5mV/LINE1V●電源:外部ACアダプターによる給電 9V 0.5A●サイズ:W150×D111×H57mm●質量:約785g/本体
(問い合わせ:フルテック ☎03-5437-0281)

電圧まで増幅し、音質を劣化させない方法でコンピュータに伝送する必要がある。単独のフォノイコライザーアンプかフォノ内蔵アンプを使い、そのアンプのライン出力をA/Dコンバーターに入力し、USB経由でパソコンに伝送するという流れを私は想定しているが、これは完全にオーディオマニア向けのアプローチだ。オーディオ装置に詳しくない音楽ファンにはお薦めできない。

手軽にレコードをデジタル化する製品

そんななか、もっと手軽にレコードをデジタル化するための製品が、最近になっていくつか登場してきた。ここで紹介する2つの製品は、いずれもフォノイコライザーアンプを内蔵し、その出力をアンプを介さずに直接パソコンに伝送することができる。カートリッジの出力をつなぐアナログのRCA入力と、デジタル変換したデータをパソコンに送り届けるためのUSBインターフェースを内蔵し、すべての機能をコンパクトな筐体に収めている。

コードのChodette DUALは、高級オーディオの専門メーカーが開発したミニマムサイズのスタイリッシュな製品で、ミドルクラス以上のレコードプレーヤーを持っている人にお薦めのモデルだ。もう一方はフルテックのGT40 USB DACという最新モデルだ。こちらはコードよりも低予算で購入できるが、音質はミドルクラスの製品に迫るものがある。パソコン側には録音ソフトが必要だが、その話はあらためて取り上げる。

ところで、USBインターフェース内蔵のオーディオ機器はこれからいろいろな製品が登場する予定なので、折に触れてまた紹介することにしよう。